



2024.9.14 No.119

発行：憲法9条の会 つくば
〒305-0004
つくば市柴崎68-103
Tel/Fax 029-858-2034

10月5日（土） 憲法9条の会 19周年記念のつどい

● 平和を創る道の探求 ●

講演：孫崎 享 さん

憲法9条の会 つくばが、昨年、18周年記念のつどいで半田滋さんを招いて講演を聴いたのは、10月7日にパレスチナの武装組織ハマスがイスラエルに奇襲攻撃を仕掛けた1週間後でした。イスラエルによる「報復」は「ジェノサイド」にエスカレートし、ガザでは女性や子どもをはじめ多くの市民が、命と生活を奪われています。

ロシアのウクライナ侵攻開始からは、2年半以上が経過していますが、平和的解決への道は見えていません。

19周年の今年は、「平和を創る道の探求」というテーマで、孫崎享さん（東アジア共同体研究所・所長）に講演をお願いしました。

多数のみなさんのご参加を期待して、孫崎さんの著書『同盟は家臣ではない — 日本独自の安全保障について』（青灯社／2023年8月20日／1800円＋税）の内容を、抜粋して紹介します。

本の帯には、次のような言葉が並びます。

- ▶ これまでの日本外交・安全保障政策は、「米国を喜ばせるため」だった。
- ▶ 中国、ロシア、北朝鮮とは、外交努力をすれば、武力攻撃を受けない。
- ▶ 「敵基地攻撃」論は、10倍返しを招く。

「反撃能力、敵基地攻撃能力をどう考えるか」

・日本の多くの方は、これで日本の安全が高まったと思っているようだが、全く逆である。

戦争の歴史で、敵基地攻撃が戦術的に最も成功したものに、真珠湾攻撃がある。（中略）しかし、・・・結局日本は、軍人212万人、民間人は50万から100万人の死者を出し、降伏した。敵基地攻撃の大成功は、日本国民の破滅につながった。

・（今日の戦闘でも）被害を考慮した時、「敵基地攻撃」はとても日本の戦略とは言えないお粗末なものである。日本が今後、防衛費をGDP 2%にしたところで、軍事衝突では日本は必ず負ける。我々は必ず負ける軍事行動に行くのではなく、いかに紛争にならないかを考えるべきである。

「ウクライナ問題の理解のために」

・ウクライナがNATO加盟を申請するのはいい。それはウクライナの決断である。しかし、NATO側は「東方拡大を

しない」とロシアに約束している。これが冷戦後の欧州の安全保障の基本だったのである。これを今、米国が変えようとし、緊張が生まれた。これが、ウクライナ問題の本質である。

・事態のこうした展開は、ウクライナ戦争が単なるロシアとウクライナの戦争ではなく、米欧日など旧帝国主義勢力と、中ロなど非米諸国間の、世界を二分する対立・抗争の様相を呈してきていることを教えてくれている。

・約束を守ること、それは平和への第一歩である。

「米国の狙いは、台湾と日本が中国と軍事紛争を行うこと」

・台湾（問題）で、米中は何のような約束をしてきたか。
・台湾が独立を宣言した時、あるいは独立を宣言するのが確実な時、中国が台湾に対して軍事行動をとる可能性は高い。

・（しかし、台湾の世論調査は、70%近くの人々が）少なくとも当面現状維持である。台湾が現状維持であれば、中国が武力行使をする可能性は極めて低い。

・台湾正面で米中が戦えば、米軍は負ける。（中略）米軍が戦闘に使える基地は、沖縄の嘉手納基地とフィリピンの基地しかない。

・では、米国は何を指すか。①日本と台湾に、中国が容認できない行動をとらせる。②反発した中国に、台湾・日本を攻撃させる。③これでもって、国際的に中国に制裁を行う。④中国の経済発展には国際貿易が極めて重要であるため、中国経済は甚大な被害を被る。当然中国の指導部は、国内での支持を喪失し揺らぐ——という筋書きであろう。

・そのためには、台湾・日本に、軍事紛争の際には、米国が常に軍事的に支援するという幻想を与えていく必要がある。逆に言うと、「米軍が日本を守る」は幻想にすぎないことを認識することが、日本が中国との軍事紛争を避ける道である。

* 孫崎さんの著作は、つどい当日の会場でも販売する予定です。是非、会場にお越しください。



「平和を考えるパネル展 ～1945年 沖縄戦の残したものの～」

8月17日（土）～20日（火） 洞峰公園・新都市記念館ホール



入口正面に、沖縄県立平和祈念資料館（旧館）のメッセージが掲げられます。

◆沖縄戦の実相にふれるたびに／戦争というものは／これほど残忍で これほど汚辱にまみれたものはない／と思うのです

この なまなましい体験の前では／いかなる人でも／戦争を肯定し美化することは できないはずです

戦争をおこすのは たしかに 人間です／しかし それ以上に／戦争を許さない努力のできるのも／私たち 人間 ではないでしょうか

戦後このかた 私たちは／あらゆる戦争を憎み／平和な島を建設せねば と思いつづけてきました

これが／あまりにも大きすぎた代償を払って得た／ゆずることのできない／私たちの信条なのです

展示は、三つのコーナーから成ります。

(1) 米軍の上陸から、苛酷な地上戦。米軍の圧倒的な兵力と火力で焦土と化す沖縄。

日本軍は壊滅し、すべての男子中学生は「鉄血勤皇隊」として戦闘に参加。

逃げ場を失い、捕虜となる住民、集団自決。沖縄戦の死者数、合計20万人超。

——白黒の写真23枚で、沖縄戦の事実が伝えられます。

(2) 琉球新報が、沖縄戦60年後に、当時、リアルタイムで新聞が発行されていたら、という設定で編集した「沖縄戦新聞」の10の紙面が並びます。

- ・1944.8.22「対馬丸が沈没」：米潜水艦の魚雷受け／学童775人含む1418人犠牲
- ・1944.10.10「米軍が無差別爆撃」：沖縄全域に延べ1400機／民間人含む668人死亡／那覇の9割焼失
- ・1945.3.26「慶良間に米軍上陸」：沖縄戦始まる／座間味、渡嘉敷で「集団死」
- ・1945.4.1「本島に米軍上陸」：兵員18万3千人投入／日本軍反撃せず／各地で「集団死」
- ・1945.4.21「米軍が伊江島占領」：住民1500人が犠牲／日本軍守備隊は壊滅
- ・1945.5.5「日本軍の総攻撃失敗」：沖縄戦は事実上敗北
- ・1945.5.27「32軍、首里司令部を放棄」：摩文仁へ撤退／組織的戦闘力を失う／避難民、巻き添え必至
- ・1945.6.23「沖縄戦 事実上の終結」：米軍、占領を宣言／牛島司令官ら自決／南部で住民8万人保護
- ・1945.8.15「日本が無条件降伏」：政府、ポツダム宣言受諾／天皇が「戦争終結」放送
- ・2005.9（60年後）「軍隊は住民を守らない」：本土防衛の“捨て石”に／日本兵が住民をスパイ容疑で殺害するケースが各地で

(3) 沖縄戦の意味と全容をまとめた写真とカラーの図版パネル、18枚。

〈解説の言葉より〉

- ・沖縄に配備された日本軍は、「軍官民一体の戦闘協力」を指示。各地に飛行場建設と全島要塞化を進めた。そして県民を根こそぎ動員し、本土と天皇制を守る（国体護持）ための“捨て石”作戦＝沖縄戦へと突き進んだ。
- ・戦闘の足手まといになる老幼婦女子の排除と、軍の食糧確保のために、10万人の島外退去（南九州と台湾）を強行。
注：(2)の1944.8.22の「対馬丸」は、この疎開のための軍用艦の一つだった。
- ・日本軍は、天皇の名によって壕から住民を追い出し、住民と朝鮮人を虐殺、「自決」（いわゆる「集団自決」）の強要、傷病兵の遺棄・棄殺などの蛮行を重ねた。
- ・子どもは壕の中で、日本軍にも殺された。戦死した母親の乳にすがる子の姿も・・・。戦場をさまよう孤児の姿も多く見られた。

〈戦後〉

- ・米軍に捕まった軍人・軍属は、捕虜収容所に隔離され、軍作業に使役された。
- ・米軍は、1949年の中華人民共和国の成立と、1950～53年の朝鮮戦争で、沖縄基地の重要性を再認識。「反共の防波堤」として、沖縄の恒久基地化に着手。そのため、“銃剣とブルドーザー”による新たな土地強奪を行った。
- ・日本復帰（1972年）にともない、「自衛隊」が「米軍の補完部隊」として沖縄に配備された。配備先、部隊、人員、配備日も、米軍によって取り決められた。日本の主権を損なうものであった。

パネル展の4日間の入場者は、約220人でした。若い人がカップルや友達連れで立ち寄ってくれる姿も目立ちました。ほとんどの方が、一点一点のパネルを食い入るように見て、アンケートにも熱心に答えてくださいました。

〈アンケートの声より〉

- ・皇国を信じて戦ってきた沖縄の方々が、皇国を守るための捨て石となる扱いを受けたことが、とてもよくわかる展示でした。「米軍より日本軍の方が怖い」、集団自決の強要など、両国の間に挟まれ、ただ死んでいくという選択肢しかなかった島民の方々の絶望は、語り継がなければいけないと思います。（50代）
- ・沖縄での戦争について、学校の授業でも簡単にしか学んでいないので、今回の展示で多くのことを知れてよかったです。改めて、戦争は許されるものではなく、若者もその意識をしっかりと持たなければならぬと再確認した。（20代）
- ・現在教員として働いているので、戦争について子どもたちに教える立場として、自分がまず戦争についてよく知っておかなければならないと思いました。（20代）
- ・日本の捨て石となった地に、再び新しく基地が作られている。激しい怒りを覚える。何としても止めたい。政権交代しかな。（70代）



茨城の戦争遺跡ツアー（6/29：「結」7月号で報告）の感想

- ・戦争の恐ろしさ、人権無視の所業を、心に刻みました。生涯忘れ得ぬ体験をしたと思います。
- ・今回の訪問は、実に貴重なものとなった。戦争があったことを賛美してはいけない。これからも我々の役目として、平和を語り継いでいかねばならないと思う。
- ・軍国主義時代の洗脳される高揚や惨禍を、遺構や道具などから想起する貴重な時間になりました。
- ・「このことを教訓に」というのも、何か教育的ではないか。では、どうするのがいいのか。それは、史実を未来に生かしていくことだと思う。悲しい歴史はもう二度と繰り返さないという気持ちをもつことではないだろうか。
- ・小学生の頃、祖父から戦争中の話を聞き、「平和」ということに関心を寄せ、どうしたら戦争がなくなるか、自分なりに考えてきました。今回の「茨城の戦争遺跡を訪ねる」も、お話を聞いてすぐに申し込みました。

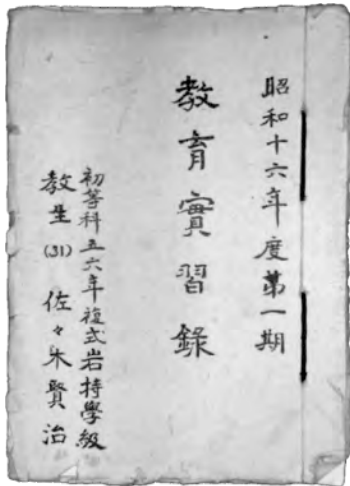
ツアーでは、筑波海軍航空隊記念館と、内原郷土史義勇軍資料館、水戸平和記念館をまわりました。各所を訪れて、あらためて戦争は今からそう遠くない時代の出来事であり、人々の生活のすぐそばにあったのだということに気づかされました。そして、自分の住んでいる茨城には、特攻や満蒙開拓に関わる施設が置かれ、過酷で悲惨な戦争に深く関わった場所だという事実に、しっかりと向き合う必要があると感じました。

最後に見た、空襲で焼けた水戸の銀杏は、今ではすっかり芽吹き返し、青々とした葉を実らせていました。その姿は、戦後再び立ち上がった人たちの思いや生き方を表しているようで、涙が溢れそうになりました。

私の祖父は、青春時代が戦時中と重なり、戦争で自身の兄を亡くす悲しみも経験しています。私は、子どもに関わる仕事に就いてから、祖父から聞いた戦争の話と平和への想いを、どのようにしたら次の世代に繋いでいけるのかを考え続けています。今後は、今回感じたことを伝えながら、子どもたちと一緒に戦争と平和について考えてゆければと思います。

このような貴重な機会をいただき、ありがとうございました。（Y.Sさん：20代男性）

戦時中の「教育実習日誌」



唯一、若い年代で参加したY.Sさんは、当日、祖父の兄（大伯父）の戦時中の「附属国民学校」での「教育実習日誌」のコピーを持参してくれました。「昭和十六年度第一期」の「初等科 五・六年複式学級」の教生としての実習記録です。はじめて子どもたちの前に立つ初々しい不安と喜びが、100枚以上の罫紙に丁寧に綴られています。その中で、次のような記述もあります。

▶学校とは皇国民錬成の道場であり、教師とは将来の皇国の民のリーダー、それは頭で口で授けると云ふ事ではなく、自ら血と汗を流して体で或物、本質的な事柄を掴ませる為の先導者でなければならぬ。教育とは、こうした意味から、斯（か）くあらねばならぬことを心と心、魂と魂のふれ合ふ事によって児童の胸に生ぜしめ、皇国の道に合致した一つの型をつくりあげる事ではなからうか。

▶今日は、「青少年学徒二賜ハリタル勅語」を我等に賜はりし記念の日である。二年前の今日、天皇陛下には二重橋前廣場に於て、親しく学生生徒を御親閲遊ばされ、「青少年学徒二賜ハリタル勅語」を下し賜はったのである。其の時、全国の学徒の如何に

感激し、御聖旨にこたへん事を誓ったことか、今も其の當時の感激は、心にまざまざと蘇る。

▶（ある日の授業見学）

第一校時、修身。第六、勤勉。第二校時、算数。第三校時、五年・國史（桓武天皇）、六年・読み方。第四校時、体操。

▶（二校時、全校体操の時間）

最初、全校国民体操。次に、歩行訓練（正常歩）より駈歩にうつる。レコード二枚（裏表）十二分の駈歩だ。相當に強い運動だと思った。續いて、班別の徒手体操。最後に、全校建国体操。此の全校体操は一週間に三度あり、校長先生のお話では、これによって男の子は全部、甲種合格にすることを目指して居ると云ふ。

*「修身」は、現在の特設科目「道徳」につながるものですが、これは『論語』の「修身齊家治國平天下」（身をおさめ、家をととのえ、国をおさめ、天下を平らかにする）という言葉由来します。つまり、「個人」はより大きな集団のために存在し、「お国」のために奉仕することが教育の目的だということです。

いま、「教育」の在り方も、戦前に回帰させられようとしているのではないのでしょうか。





『原爆 いのちの塔 —広島赤十字病院—』

8月6日(火) 22:00~22:55 NHKスペシャル

日本人にとって永久に忘れられない二度の原爆被災の日、1945年の8月6日と8月9日。

広島赤十字病院は元も陸軍の病院で鉄筋コンクリート造りであったので、倒壊を免れ、被爆直後から助けを求めて来た負傷者や患者1万人の命の救助にあたった。

まず廃墟のなかに高い塔(給水塔か)を目立たせ凛とそびえる病院棟の姿が浮かび上がる。最近、この病院の当時の活動実態が再調査され、竹内鈿病院長や入院患者、看護者等が記したノートが見つかり、それら記録や証言から彼らが原爆の魔手にどう立ち向かい、どう患者の命を救おうとしたかが描かれる。また戦後広島に進駐し、被爆の実態を調べた米軍の行動とアメリカ政府の考え方も明らかにされる。

赤十字病院は爆心地から1.5 kmにあった。病院長の竹内(当時55歳)は自室で執務中、8時15分、窓の外に閃光を感じ崩れ落ちた物の下敷きとなり失神した。全身七ヶ所を骨折したまま、病床から病院復旧と患者治療の指揮にあたった。

看護師養成コース1年生の生田かつ子(現在95歳)は直ちに病院業務にあたった。同じく上野照子(94歳)の手記では、被爆負傷者が4日間にわたり病院に押し寄せ、着くとその場で絶命する光景が続いた。人手がないので、遺体は自分たちで焼くしかなかった。父親が迎えに来たが、持ち場を離れることができないと帰ってもらった。

その後、医師たちは、患者の原因不明の症状に次々に遭遇する。外傷は少なく、回復傾向にあっても高熱を発し突然死する。放射線による障害である。この間、601人が入院していた中で、70人が2週以内で亡くなった。

敗戦後、竹内院長は病院に残り、復旧と突然死の調査に尽力する。理化学研究所の仁科博士の協力を得て被爆地の異常に高い放射線量を明らかにする。また国際赤十字のトップ、マルセル・ジュノーに情報提供する。

1945年9月には占領連合軍の広島視察が行われる。竹内は、Redcross Hospitalの腕章を国際アピールのため病院でも使用するよう指示する。またジュノーを介して極度に不足していた医療物資の支援約束をGHQ米軍准将のクロフォード・サムスに取りつけた。しかしこの約束は守られることはなかった。番組は、GHQにとっては、原爆の影響・効果の把握が第一であり支援は二の次であったことを描き出す。推測になるが、人類最初の核爆弾を作り、都市に使用したアメリカとしては、その兵器としての性能・破壊力をいち早く知りたかったであろう。核兵器の開発から実用に至る実験系の完成度を測るにはこのときを措いてなかったのである。原爆被害のデータ隠しやアメリカのためだけの調査研究だった。

戦後も、広島赤十字病院では、竹内はじめ現場医療従事者の闘いが続く。

彼らを悩ませた被爆者の症状の解明は、アメリカ政府の提唱で広島に設立された原爆障害調査委員会(ABCC)が引き継いでゆくことになる。(1948年1月に日本政府参加)

竹内は1948年末に職を辞した。彼は戦争前の著書に「戦争は新しい治療法や薬を生み出すから医療の母だ」と書いたことを深く悔いた。1974年に84歳で没するまで、研究に携わる医師を助け、教会に礼拝する日を過ごした。番組は痛切な言葉をもって終了する。

「これらの人達の体験はどれくらい世界に届いているだろうか」
(三浦)

『科学が変えた戦争』

1945太平洋戦争×2024現代の戦争』

8月11日(日) 15:00~16:30 TBSテレビ

◆特攻潜水艇

海軍の潜水艇「海龍」は、すでに戦闘機を失っていた日本が、起死回生のために極秘に開発・生産した、当時、世界一の性能を持つもので、先端部の「燃料」を「爆薬」に変え、特攻艇となった。結局、出撃命令が下される前に、日本は敗戦した。

その開発を担った人は、「科学技術が戦争に使う兵器を進化させていく」と振り返る。それは、今も——。

◆核兵器を生んだ科学

1945年8月6日、広島に投下された「原子爆弾」は、その日だけで5万人超(年の内に約14万人)の命を奪った。オッペンハイマーもアインシュタインも、核兵器開発の過ちを認めたのは、それが使用された後だった。

大戦後の核兵器の開発は各国で続き、英国の水爆実験では、“人体実験”といえる被害を受けて今も苦しむ人がいる。国は、当時の医療記録の開示と補償に応じていない。

◆“使える核”の開発

そして現在、小型で超高速で、ピンポイントで攻撃ができる核の開発が進められている。それは、核兵器の先制攻撃使用への道を開く。

◆「無人機」が変えた戦争

ウクライナ戦争では、爆弾を積んだ小型のドローンが、人間や艦船・建物を自爆攻撃する映像が映し出される。「戦場」から離れた場所で映像を見ながら操作していた兵士は、映像が止まった(ドローンが命中した)後、インタビューに「特に感情はない」「ためらいは減る」と答える。

“殺人兵器”ドローンは、3Dプリンターを使って容易に生産されている。1機あたり、約7万円で作れるという。それは、大量生産・大量殺人を意味する。

◆毒ガス兵器

科学によって生み出される兵器——それは「効率」を求める。

第一次世界大戦で初めて使われた大量破壊兵器「毒ガス」が、第二次大戦のアウシュビッツの虐殺(100万人が殺害された)にも使われた。「短時間で大勢を殺せる」のが毒ガスだった。

◆焼夷弾からクラスター爆弾

1945年3月10日の東京大空襲に使われたのは、新兵器の「焼夷弾」だった。一晩で10万人の命を奪った焼夷弾の下の東京は“火の川”のようだったという。ゼリー状のガソリンに混ぜた爆薬は、水を掛けても消えず、38本をまとめて投下する焼夷弾は、「クラスター爆弾」の走りとも言われる。「より多くの人を殺す」ために開発されたものだった。

国連は、「クラスター爆弾」や「化学兵器」の使用を禁止する決議もしているが、戦争当事国には届かない。

◆心を病む兵士たち

病院でウクライナ軍の兵士がインタビューに答える。ドローンが近づいてきて、その音が大きくなりながら目の前に迫ってくる恐怖は、忘れられない。

19歳でアメリカ空軍に入り、ドローン攻撃を担った青年は、PTSDに苛まれている。1万キロ離れたアフガニスタンの山中を歩いている三人の男性の姿がモニターに映り、武器を持っていると判断されて攻撃を命じられた。自分が操作したりモコンで発射されたミサイルが二人を即死させ、一人が足を抱えて転げ回っている映像から目を離すことは許されなかった。

アメリカのドローン・パイロットの6.15%が、PTSDを患っているという。

◆スマホに「戦場」が流れてくる

それを見た人の“心”は、だから「戦争」はイヤだと思ようになるか。それとも——。科学技術は、「戦争の悲惨さ」を伝える手段にもなり得る。けれども——。
(後藤)

「争いの絶えない国から来た私が今、日本で言えること

～ 子どもたちへ残そう 悲しみのない未来を～



「殺し」「血を流す」ことがエスカレートしていった。ガザの死者は、すでに3万人（子ども1万4千人）、瓦礫の下にはさらに1万人（？）が埋まっている。

◆「戦争」とは

それでも「戦争」が続くのは、それによって「金が儲かる」人がいるから。アメリカは、ガザに支援食糧を投下しながら、イスラエルに武器を輸出している。

「戦争」の犠牲者は、①殺された人、②永遠に悲しむ遺族、③殺した人（PTSD：心的外傷後ストレス障害）。

そして、犠牲者を生み出すのは、「政治家」。軍人が殺すのは一人一人の「人間」であるのに、自分が殺しているのは「敵」だと思い込まされている。「敵」という概念は、本来、人間のDNAにはない。「敵」と戦わせるように仕向けるのは、「教育」の力。

◆日本が持っている大切なもの

①日本国憲法、②広島・長崎の体験、③イスラエルからもパレスチナからも信頼されている立場（武器を供与しない）

【ダニー・ネフセタイさんの著作】

- ・『国のために死ぬのはすばらしい？』
2016年12月（2024年5月、第六刷）／高文研／1500円＋税
- ・『イスラエル軍 元兵士が語る非戦論』
2023年12月／集英社新書／1000円＋税
- ・『どうして戦争しちやいけなの？』
2024年3月／あけび書房／1600円＋税

* * *

ダニーさんは、全国生活指導研究協議会の全国大会（8/2～4、埼玉・飯能）でも講演し、「平和教育」の分科会では、教員・学生たちと討論を行いました。

- ▶日本の教育の使命は、“考えない生徒”を育てること。学校では、「対話による解決」という体験を学ばせない。
- ▶私たちは、「知る」ことが大切。情報量は膨大に増えているが、フェイク情報もタレ流されている。どうしたら“大切なもの”を選び、“真実”を知ることができるか。
- ▶Jアラート（北朝鮮からの飛翔体）訓練が、学校でも常態化している。

ナチの元帥だったヘルマン・ゲーリングは、こう語っている。——普通人間は、戦争を望まない。しかし、政策を決めるのは国の指導者であり、国民を戦争に向かわせるのは常に簡単なことだ。国民に「攻撃されつつある」と言い、「平和主義者は愛国心に欠ける」と非難するだけでいい。

▶私たちは、危機的な状況に陥ったとき、自分ひとりで論理的に考えるしかない。今のイスラエルも日本も、私からすれば全ての電源が故障し、真っ暗闇の中を突っ走っているように見える。

どうか皆さん、論理的に考えましょう。

（記・後藤）

7月7日（日）午後、つくば市の豊里で、上記の講演会（主催：平和を願う市民の集い）が催されました。

ダニーさんは、1957年、イスラエル生まれ。徴兵制でイスラエル軍に入隊し、3年間、空軍に所属。後に日本人女性のパートナーと出会い、1988年に埼玉の秩父に移住し、木工家具作家をしながら、全国で講演活動をしています。

◆「教育」の罪深さ

イスラエルは、ユダヤ人の入植者による国であり、ユダヤ人の土地が7割になると、パレスチナ人が住めるのは、ヨルダン川西岸とガザ地区だけになった。

イスラエルの学校の地図では、パレスチナ人の土地はガザ地区だけ。だから、子どもたちは、ヨルダン川西岸にパレスチナ人がいると、侵略されると思って迫害する。イスラエルの平和教育は、「絶対に戦争はしない」という意味ではなく、「平和は大切だ。そのためには力（抑止力）が必要」というものだ。

そして、イスラエルの少年の夢は、空軍のパイロットになること。自分はパイロットにはなれなかったが、戦闘機を飛ばす仕事をしていた。日本に来て気づいたのは、「戦闘機」はカッコイイものではなく、「人を殺す」「物を破壊する」機械でしかなかったということ。

◆「軍隊」を疑う

「軍隊」というのは、①差別（“良い”側と“悪い”側に分ける）、②人間のランク付け（→命令に従うことを評価、「人を殺せ」という命令でも）、③解決方法は「話し合い」ではなく「武力」——の三つで成り立っている。それは、自衛隊も同じ。

「武力」に頼るとキリがない。「抑止力」はイタチごっこ。

◆「報復」という名の「ジェノサイド」

イスラエルでは、2000～05年、パレスチナ人によるユダヤ人への自爆テロが続くと、パレスチナ人をガザに閉じ込めて、壁を作った。カメラとセンサーで監視し、食糧の搬入を制限し、フェンス越しにミサイルを撃ち込んだ。

2023年10月7日、ハマスがフェンスを越えて奇襲攻撃をしたのに対して、イスラエルは「復讐」「報復」一色になり、

東海第二原発の工期延長と、敦賀原発2号機の再稼働不適合

～日本原電と大手電力会社・原発推進国策の、開き直りと無責任～

寄稿：江尻加那さん（茨城県議）

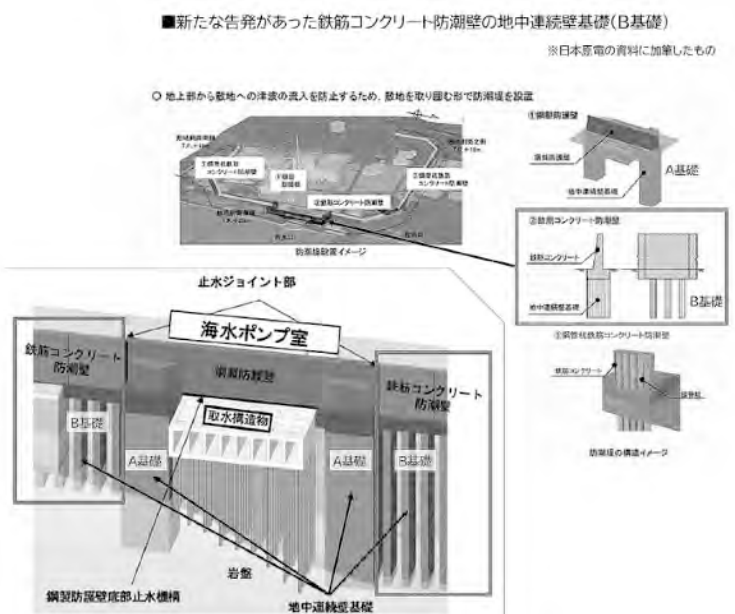
東海第二原発の再稼働工事完了時期が延長された。2年3か月延ばして2026年12月だという。延長は3回目。当初は2021年3月完了予定だったので、5年以上延びたことになる。原発専門会社がひとつも電気をつくらず、再稼働工事をこれだけ延ばして経営に影響がないのか？決してそうではないはずだが、原電に毎年基本料金を払い続けている電力会社と、その電力の契約者である国民の負担で賄われるから、原電は痛くもかゆくもないのだろうか。とくに東京電力は、基本料金約550億円のほかに、再稼働工事資金として約1,400億円を原電に「前払い」しているという。だから、原電は何としても東海第二を再稼働させて、東京電力に返済しなければならない訳だが、再稼働工事は延長された。物価高騰、人件費高騰の折、当初2,350億円（安全対策費1,740億円+テロ対策費610億円）の工事費は、5年以上延長となれば当然増額されそうだが、変わりないという。そもそも2,350億円などではできず、東京電力や東北電力など5社が3,500億円を資金支援する。東海第二原発から電力供給を受けない中部電力、北陸電力、関西電力もが支援に加わったのは、同じ日本原電の敦賀原発から供給を受け、かつ株主でもあるから。

しかし、その敦賀原発も1号機は廃炉に、2号機は先日、原子力規制委員会から再稼働「不適合」の判断が下された。原子炉建屋直下の断層が活断層である可能性が否定できないことによる。それでも原電は2号機の稼働を諦めないとアピールしている。もはや、安全で低廉な電力を供給するという役割などみじんもなく、電力会社と国策のために再稼働にかじりついているように思う。そして、今や政権を投げ出した岸田首相の原発最大限活用政策・GX法を後ろ盾にして、日本原電は老朽原発の再稼働にまっしぐらだ。原子力災害の発生防止に万全の措置を講じるべき原子力事業者の責任を投げ出している。そうでなければ、東海第二原発の防潮堤に、あれほど重大な欠陥工事は起きなかったのではないかと。施工不良を起こさないようにあらゆるケースを想定して最善の管理を行う、それでも不良があれば初期段階で発見してやり直す、ミスを繰り返さないよう原因を究明して排除する、問題があれば公表するといった当然の責任を果たしていない。果たす姿勢がないのか、能力がないのか。どちらにしても、危険な原発を動かす資格がないと言わざるを得ない。だから私は「工期延長ではなく、廃炉にすべき」と言い続ける。そもそも再稼働しなければ取水口は必要なく、取水口をなくせば“凱旋門”のような難しい構造の防潮堤を造らずに済み、廃炉作業中の安全対策に必要な防潮堤に変更すればいいのではないだろうか。

原電東海事業本部の坂佐井本部長は8月23日、工期延長を公式発表した県庁での記者会見で、「再稼働を待っていてくれる方々、心配いただいている方々に申し訳ない」と繰り返したそうだ。どこに顔を向けているのかがよく分かる発言だ。さらに、防潮堤の施工不良は「設計上の問題ではなく、

施工上の問題」と何度も強調したとのこと。自分たちがやった設計はまともだったのに、安藤ハザマ共同企業体（JV）の工事が下手だったと責任を転嫁している。もちろん、業者にも大きな責任がある。日本共産党に告発を寄せた工事関係者も、「問題に対して真摯に向き合わず、隠蔽して工事さえ完了してしまえばいいと思われる請負会社の姿勢に疑いの気持ちをおくせない」と批判した。取水口部の鋼製防護壁を支える地中連続壁基礎の工事实績がJVになかった訳ではない。しかし、告発者によると、「いつもは基礎専門会社に外注していたが、東海第二の現場は違った。自分の子会社にやらせて、少しでも利益を上げようと考えたのではないかと指摘した。そして、基礎をつくるために掘った穴に流し込む安定液はデタラメで、データは改ざんされ、崩れた掘削壁に無理やり鉄筋カゴを埋め込んで変形し、カゴを引き上げてやり直すこともせずコンクリートを流しこんだと言う。「工法を変えたほうがいい」と提案したが聞き入れられず、告発者は現場を外されたのだ。しかし、結果として設計変更の事態に至っている。これでも自分たちに問題はなかったと開き直る原電に、原発運転の資格があるのかと問いたい。原発運転は、多くの請負業者が現場に入って作業し、定期点検も行われる。そのすべてにおいてミスを防止し、安全を管理するのが原電の役割ではないか。こんな会社では、仮に再稼働して事故を起こしても「作業上の問題」として請負業者に責任転嫁するのが関の山だろう。

新たな施工不良の告発も寄せられた。原電が認めた南北2つの柱基礎（A基礎）に隣接する地中連続壁基礎（B基礎）も、安藤ハザマのJVが施工し、同様の施工不良があるとの証言。B基礎はすでに上部の防潮壁が造られ、基礎部分は目視不可。しかし、基礎周囲を掘れば施工不良が分かるという。「告発なければ隠されたまま」では済まされない。明らかにすべきだ。徹底追及していきたい。





● 憲法9条の会つくばの活動から

当会では毎月第3日曜日に定例署名、9日に9の日署名を行なっています。その他、「戦争をする国づくりNO@つくば」と共に、毎月3日と19日に、「市民スタンディング」を行います。

- ◆賛同人 2024年8月26日現在
総数1006名（つくば市内714名）
- ◆憲法改悪を許さない全国署名 1276筆
大軍拡に反対する請願署名 404筆
ともに2024年8月26日現在

● 署名活動について

署名行動は、参加者の健康を考慮して、熱中症警戒アラートが発令された場合や猛暑日は、中止しています。7・8月は、8/9の1回のみ実施し、大軍拡反対署名が5筆でした。

当日は風もあり、木陰だとホッと一息つけるのですが、木陰を外れると日射しが強く、通行人もわずかでした。野田さんのクラシック音楽が流れる中での署名行動でした。

● 市民アクション スタンディング行動

8/19（月）12時から30分間、つくばセンター広場で、定例の19日スタンディング行動を行いました。

安倍政権が安保法制（戦争法）を強行採決した2015年9月19日を、私たちは決して忘れず、強行採決で作られた「戦争法」の廃止を求めて、毎月19日に行動しています。

当日は猛暑日で、通常の1時間行動を30分に短縮しました。参加者は7名でした。当会の19周年記念のつどい（10/5）のチラシも配布しました。

● 改憲NO！ 3の日スタンディング：100回目、達成！！

全国の「憲法9条の会」発起人の一人である澤地久枝さんの呼びかけに応え、2015年11月から、つくば市TX駅頭で始めたスタンディングですが、途切れることなく続き、8月3日に100回目を迎えました。

当日は、節目を意識してか、猛暑の中、普段の2倍以上の11人が参加しました。10/5のチラシも配り、若い方の反応がよかったのが印象的でした。



● 8月4日、『朗読劇 ヒロシマ・ナガサキ 2024』（ノバ・ホール）

多くの皆さまにご来場いただき、ありがとうございました。

今年度は、新たに手記や詩を加えるなど台本の構成を一部変更し、原爆の実相がより伝わるようにしました。

「サラダの会」では、原爆の悲劇を風化させないよう、これからも朗読劇を続けていきます。（菊地二三五）

● 8月6日・9日 北斗寺での「平和の鐘つき」

6日は、新婦人・平和委員会・年金者組合などとの共同行動「平和の波」として行われました。参加者は、8歳の小学生から88歳の方まで、幅広い年齢・性別の16人。8時15分に鎮魂と平和を願う黙祷をし、鐘楼に上って一人ずつ鐘をつきました。その後、年金者組合のコカリナ・サークルの伴奏で「青い空は」「筑波山」を歌い、参加の感想などを述べ合って解散しました。

9日は、9条の会独自の行動でしたが、4人の賛同人の方が参加しました。



● 荳崎平和のつどい（8/9～13、荳崎交流センター）

荳崎地域の平和委員会や9条の会の皆さんによる「平和の集い」。今年は、広島市の基町高校の生徒たちが被爆者の声をもとに描いた「原爆の絵」（複製）の展示と、原爆被害者の児玉美智子さん講演会「被爆者からあなたに今伝えたいこと」が開催されました。講演会には70人以上の参加があり、展示は100人以上の見学者があったとのこと。

● 茨城県民教「いま、改めて日本国憲法を学ぼう」（8/25、いばらきコープ土浦）

一般市民や現職・退職の教員が集まって、ともに学ぶ学習会です。今年は、上記のテーマでの開催で、17名の参加がありました。

つくば市内の小学校の先生から、6年生の社会科の授業で、子どもたちと「日本国憲法」を読み、考えた実践が報告されました。現在の学習指導要領では、「戦争の歴史」を学ぶ前に「日本国憲法」を学ぶようになっていきます。なぜ「日本国憲法」（前文）が生まれたのか、子どもたちに知らせないようにしているのでしょうか。

先生は、教科書の他、新聞や市のHP、広報誌など多彩な資料から、子どもたちに生活の中の「権利」や「自由」に目を向けさせ、そこから憲法の条文を読み込んでいきます。その中で、憲法の「三原則」を学んでいきます。

授業を終えてのMくんの感想です。「今年の社会は難しい。でも、難しくてももしろい。」



『風が吹くとき』レイモンド・ブリッグズ 作

アニメーション映画：1986年／英国・85分 絵本（日本語版）：1982年／篠崎書林



この夏、映画が日本で37年ぶりに再上映されました。原作の絵本が出版された1982年前後は、冷戦下で核戦争の脅威が高まっている時期でした。映画は、弾道ミサイルが配備される実写映像から始

まります。（以降も、戦闘機やキノコ雲のモノクロの実写が、アニメーションの淡い映像に、時々挿入されます。）

丸々とした体の老夫婦は、田舎の一軒家に二人で暮らしています。退職した夫・ジムが図書館で半日、新聞を読んで帰宅すると、妻・ヒルダは「私は政治とスポーツには興味が無いわ」と言います。ジムは、「政治家が決めたツケが、最後はおれたちのところに回ってくるんだから」と言いつつ、「戦争が始まりそうだ」という情報に、政府が推奨する“家庭内核シェルター”を作り始めます。「戦時に政府の言うことを聞くのは、国民の義務だ」とも。

二人は、先の大戦で生き延び、それを懐かしむような様子もあります。

政府発行のパンフに従って、家のドアを外して壁に60度で立て掛けて“シェルター”にしたり、放射線対策に窓を白く塗ったり、14日分の備蓄食料を買いに行ったり……。『ヒロシマに落ちたのは太陽1000個分、今ではもっとすごい』というだけの知識で、政府の推奨どおりに行動します。

ラジオが「敵の攻撃が開始されました。3分以内に避難してください。表に出ないでください」と伝えます。

二人が壁と斜めのドアの間の狭い“シェルター”に入った時、セピア色の烈風がスクリーンいっぱいに広がります。

* * *

ガレキの散乱する家の中で、夫婦は生活を再開します。水道は出ず、降ってきた雨水を貯めて、見えない“放射能”に怯えながら……。外からは、何の情報も入ってきません。

二人はやがて衰弱していきます。吐き続けて、丸い顔は頬がこけ、歯茎から出血し、手足に斑点が広がります。妻の髪がゴソッと抜けます。

「最後には、お上が私たちを助けてくれる」——そう言って神様に祈りながら、画面は暗く閉じていきます。

映画のパンフにある言葉です。「政府が生んだ“イギリスで最も理想的な夫婦”」

* * *

イギリス政府のパンフレット「Protect and Survive」（防備と生存）は、実際に1980年に発行された小冊子です。

現在の日本で、南西諸島で敵からのミサイル攻撃を想定して政府が行っている“避難訓練”と、どれだけの違いがあるでしょうか。（後藤）

*日本語版の絵本は、現在は、あすなろ書房から出版されています。

◀インフォメーション▶

○19周年記念のつどい

10月5日（土）13：30～16：30

つくば市 ノバホール 小ホール

記念講演：孫崎 享（まごさきうける）さん

*今号にチラシとチケット2枚（当日清算900円）を同封しています。賛同人の方は前売り料金900円で参加できますので、チケットをご持参下さい。

○平和のつどい牛久9月の部：映画上映会・講演会

*結118号同封チラシ参照下さい。

9月16日（月・祝）映画会

10：00～「ドキュメント石垣島」

「琉球弧を戦場にするな」

14：00～「ミサイル基地がやってきた 島で生きる」
各資料代300円

9月23日（月・祝）講演会

14：00～16：00「重慶大爆撃と無差別爆撃の連鎖」
講師：石島紀之さん（フェリス女学院大学名誉教授）

○9条の会つくば 1泊ツアー

11月23日（土・祝）～24日（日）*今号にチラシ同封
行先：松代大本営地下壕・歴史館、無言館、東山魁夷館
など

申込先：阿部 080-4795-1059

申込締切：10月5日（できれば9月中にお願いします）

○つくば市母親大会

11月10日（日）午前中 市民ホールやたべ
平和の分科会を憲法9条の会つくばが担当。

助言者 佐々木啓先生（茨城大学）

テーマ：平和と生活を守る社会をめざして
—“新しい戦前”にしないために—

◀行動予定▶

○9条壊すな3の日行動

第101回目 9月3日（火）13：00～13：30

第102回目 10月3日（木）13：00～13：30

いずれもつくば駅A3出口付近

○9の日署名

9月9日（月）12：00～13：00 アルス公園側歩道

10月9日（水）12：30～13：00 同

○定例署名

9月15日（日）12：00～13：00 アルス公園側歩道

10月20日（日）12：00～13：00 同

○市民スタンディング行動

9月19日（木）12：00～13：00

大清水公園またはセンター広場

10月19日（土）12：00～13：00 同